



✿ ドイツで開かれた日本の考古学展、そして奈良で開かれる帰国展

ドイツで開催の「日本の考古―曙光の時代―」（2004年7月～2005年1月）展は、ドイツのマスコミが大きく報道し合計約6万人に見ていただきました。

日本の考古学研究成果を、初めて世界に本格的に発信できました。日本固有の文化や歴史に対する認識が深まり、国際交流に大きく貢献したと思います。

戦後の日本考古学は、高度経済成長期より開発の事前に多くの発掘調査がおこなわれるようになって、目覚ましい発見が相次ぐと共に、遺跡の保存や保護・活用も進み、考古学ブームが起りマスメディアも盛んに報道を続けています。年間に全国の教育委員会や埋蔵文化財センターなどに勤める7000人を越える専門の職員が1000億円ほどの費用で8500件前後の発掘調査をおこなうという数字が端的に現状を示しています。このような状況はヨーロッパでも大きな関心呼びました。

日本の考古学はドイツに学ぶところが多く、昔から考古学の方法が似ています。理論より型式学に基づいて遺跡・遺物を分析する姿勢です。ドイ



帰国展「曙光の時代
―ドイツで開催した日本考古展―」開会式

ツから4年間、大阪大学に留学し都出比呂志教授に学び発掘調査も経験したウエルナー・シュタインハウス氏は、日本の考古学の到達点と発掘調査の現状や仕組み、社会において考古学が果たしている役割などについて展示などを通してヨーロッパに紹介したいと考え、9年前に本国の考古学研究所シューベルト博士や都出教授・田中塚前奈良国立文化財研究所長・佐原真前国立歴史民俗博物館長ら日本の考古学者に相談したのが出発点でした。

すぐさまこの企画が進み日本の考古学を世界に位置付けつつ、生態系の中で変革し連続する歴史を捉え、出土品を一括の歴史資料としてビジュアルにそして立体的に表現しようと基本姿勢と概要を固めました。6年前からシュタインハウス氏は日本に常駐し彼を中心に、資料や復元模型などの所在を調査し出品交渉にも全国に足を運び、展示の具体案が固まりました。レイアウト・デザイン、照明などの展示手法についても、ドイツで各専門家が周到に計画しました。

展示図録は、当研究所が主体になって作成し、特に写真については全国の57カ所の機関に出向き、展示資料を全て新たに撮影し、立体的なレイアウトなど新しい撮影方法が遺憾なく発揮でき、評判も上々でした。出土品や模型などの出品、撮影、各種手配などで全国の自治体・埋蔵文化財センターなど多くの方々の絶大な協力をいただきました。

9年も前から展示委員会を発足させ、十分に検討してきました。学問研究上の位置づけ、社会的な役割、展示に取り組む姿勢や進め方など、日本の現状とは大いに異なっています。ドイツでこの展示を見た日本の考古学者たちは、国内でも今だかつてこのような大規模で内容豊かな考古展はなかったと評価しました。この帰国展は、3月23日から5月8日まで奈良国立博物館で開催されています。（平城宮跡発掘調査部 岡村 道雄）